

ボランティアの光と陰 ～ボランティアが終わる？～

柳田一郎

〒 890-0034 鹿児島市市上 5-16-34

■ はじめに

活発に行われすっかり市民権を得た「ボランティア」活動、しかし、今問題が起っている。このことについて、ご報告したい。

「ボランティア」という言葉すら無かった昭和48年、熊本市中心部で起こり百人を超える焼死者を出した太洋デパート火災における行動に始まり、いろいろなボランティア活動を経験してきた。また行政の一員としてボランティアの養成から受入も担当した。それゆえ見えてくることがある。

今、ボランティアに起こっている問題点を考えなければボランティアへの誤解が大きくなり、制度が崩壊するのではないかと危惧している。

■ 問題点

受入側とボランティア側、意識や思いがかみあわない現場。

(1) 受入側 ... ボランティアを使いあぐねている

「一番欲しいボランティアは、うるさいボランティアをやめさせてくれるボランティア」、受入の現場で、担当者達が苦笑とともに言う言葉である。特に経費節減のためにボランティアを導入した現場で多く言われる。受入側の甘い考えが生む言葉である。

(2) ボランティア側 ... ボランティアを押しつける

「せっかくボランティアをしてやったのに」、これは現場でしばしば聞こえる言葉である。特に清

掃奉仕の現場で聞こえる。ボランティアは全て善であり、何でも許されるという「おごり」が生む言葉である。

■ 解決策

受入側とボランティア側、互いの主張を一步引いて考える。

個人が生業をこえて社会に貢献したい気持ちは大切である。必要なことは、受入とボランティアの双方が、互いの立場を思いやり理解することである。

(1) 受入側の雇用へつなぐ努力、なかでも観光ボランティアの問題点

いつまでもボランティアに頼ってはいけない、雇用につなぐ気持ちを持つ必要がある。ボランティアの活用は、長くて10年であろう。それ以上にわたる活用は、受入側の怠慢であろう。

この観点からは、最近増えている街歩きや観光関連ボランティアが問題であると思う。観光客という最も我儘なお客様のニーズにこたえるには、ボランティアのレベルを超えたサービスが必要である。場合によっては奴隷のようなサービス（ツアー添乗員さんやガイドさん達の苦労を想像してもらいたい）すら要求される。ボランティアでは耐えられない。現場ではトラブルが起っていると聞く。関係者は気づかれていないのか。

(2) ボランティア側の自己中心主義を捨てる努力

ボランティアは結果としては社会貢献であるが、まずは自己実現（自己満足）である。それゆえ時としてその活動が他者や社会への押しつけやおせっかいに変わる危険を忘れてはいけない。「ボランティアをしてやったのに」と発言するような、

Yanagita, I. 2011. The problem of the volunteer system. *Nature of Kagoshima* 37: 141-142.

✉ 5-16-34 Tagami, Kagoshima 890-0034, Japan (e-mail: i-eco1@po2.synapse.ne.jp; tel: 099-258-2710). URL: <http://www5.synapse.ne.jp/ecoij/synapse-auto-page/>

良いことをしているという自己中心主義(自惚れ)は捨てなければいけない。

■ 今後の展望

「無償性」への誤解を捨てよう。周りの支援を整えよう。

ボランティア活動は無料では済まない。にもかかわらずこれまで述べた両者の間で起こるいろいろな問題は、根本的には双方ともが無償性に固執した考え方に左右されているように思われる。

(1) ボランティアの3条件... 自発性、無償性、公共性
狭義の定義である。このうち無償性という条件は基本的な誤りであろう。

受入側・活動側ともに、この無償とと思う誤りを軽く見る、あるいは無視する傾向がある。活動している人々の経済的不満は、意外と根深い。

(2) 無償性の誤り…投資の必要性

①ボランティアの語源「志願兵」への投資

祖国、あるいは大切な価値が侵略者や独裁者によって蹂躪されようとする時、個人が武器を取り、正規・非正規の軍隊を組織して、敵と立ち向かう人々である。志願兵には、個人の規模をこえた武器、弾薬、食料、制服、正規軍による指導と統制が必要とされ、いずれも無料で得られるものではない。国家による相当規模の投資により、あらかじめ準備されるものである。

②消防団への投資

世界的な評価も高い日本型ボランティアの一つに消防団がある。

消防団には手厚い手当や災害補償が完備されている。何より、消防自動車、制服、詰め所などの装備は個人で揃える物ではない。郷土愛と隣人愛に基づくボランティアの情熱が存在するが、それだけで消防団は進まない。命がけの志願に値する受入側の配慮がなされている。

社会にとって重要な活動ほど、このような配慮が必要となっていく。

■ 解決策

金銭的さらには人的投資を確立し、制度とし

て整える必要があるだろう。

(1) 金銭的投資

ボランティアは、その言葉の出発点からしても、タダ働き・安上がりな労働者ではない。ある程度の投資を必要とする。例えば、災害補償、道具、服装、訓練・学習、詰め所・事務所、食事、旅費・交通費もある。

災害補償などは、もっとも初期に投資・整備されるべきことであろう。そのことで、活動への責任感が強くなり、充実していくであろう。

(2) 人的投資

受入側には、人的投資(専任担当者)も必要である。担当者はボランティアのメンタル面のフォローアップ(仲違いの仲裁等)まで必要とされ、内部業務以上の覚悟が必要である。可能なら、担当者はボランティア活動経験者が望ましい。

■ 補足

NPO 法人の問題点「蟹工船か、NPO 法人か」。

ここで、ボランティアを熟知する人々により起こる問題も指摘しておきたい。ボランティアの社会的な役割の増大により制度化されたのが「NPO 法人」であった。少なくともその創設に関わった私達の思いはそうであった。

しかし、最近、前述の言葉が聞かれるようになってきた。一部 NPO 法人が、ボランティアを「虐待」・「酷使」しているということである。ボランティアの内部を知るがゆえに、善意を利用する姿勢は批判に値する。猛省を促したい。

■ 最後に

誰もがボランティアをしている。

「この社会は、ボランティアをする、されるの繰り返し(アレック・ディクソン)」と言われる。意識していなくても、生きている限り、社会、地域や家庭の中でさえ、ボランティアをしている。ボランティアは特別なことではない。特に、ボランティアをする人が理解できないという人々は、そのことを良く知って欲しいと思う。